

マルクス主義の間違いについて — 自伝的考察 —

川瀬 健一

はじめに

私自身がマルクスの思想と出あったのは、大学一年の時。入学した国学院大学で、大学法制定反対を唱える自治会の学生と討論したときであった。かなり弁の立つ学生で、まったく刃が立たなかった。悔しいので書店に行き、マルクスの著作を物色して購入して読みふけた。目的は自治会の学生によって立つ思想を勉強して彼を論破するつもりであった。

だが逆にこの思想の虜になってしまい、これが後年、教師になった後に、ある党派に入って活動し、労働運動にも邁進することになるとは、当時は露とも思わなかった。

しかしその後紆余曲折がある中で、マルクス主義は誤っているのではないかと考えるようになった。

これはマルクスが間違っているということではない。マルクスの思想を、彼の弟子だと自称している人たちが誤ってと

らえ、その誤った思想がそのままマルクスの思想だとして世間に広まり、これが多くの社会運動の発展を阻害してきたということである。

この問題をどうとらえたのか。そしてなぜこのような認識に立ち至ったのか。この問題を、私の自伝的考察と併せて提示してみよう。

保守派との連携について

— マルクス主義の間違いについて —

昨年春に、私は次のような文章を書いた。今所属している小さな政治グループの総会のためである。きっかけはその前年に行われた都知事選挙で、脱原発を掲げ、小泉元首相に支持された細川元首相を、脱原発派が支持するのかしないのか論争になったことである。

★保守派との連携の問題について

先ごろ行われた都知事選挙において、小泉・細川両元首相コンビによる脱原発を掲げた運動が起きた際に、左翼の間で、この動きと連携するのかもしれないのかの論争が起きた。

この問題は、単に都知事選挙における戦術的問題である以上、安倍政権の成立によって、極右民族主義が政権を握ったことで次々と民主主義的諸制度が壊されていく状況にあつて、これと対抗して民主主義を守る確固たる政治勢力が存在しない現状に鑑みて、この現状を変えるための戦略的問題であると思う。

したがってこれを、人民戦線的な戦術レベルの問題としてとらえるのは狭い見方である。

もともとこれは、いまだに保守派と言えど敵と考える左翼に対して、保守派との連携の必要性を訴える際の方便と考えればこれも納得できないわけではないが。

●人民戦線とは

人民戦線が唱えられたのは1929年の世界恐慌をきっかけとして資本主義経済の危機が顕在化する中で、西欧において、極右民族主義たるファシズムが大きな勢力となり、イタリア・ドイツに続いて、フランスやスペインでもこの勢力が政権を握る可能性が見え、このために労働者が社会に進出する基盤である民主主義的諸制度が解体される危険が出てきた。

しかもこれに対して、左翼は単独で対抗できる勢力を持っていなかったために、当面の戦術的対応として、極右民族主義と対立する保守派とも連携する必要があるとして採用されたものだと理解している。

いわば資本主義の危機が進行しているのにもかかわらず、革命主体がいまだ未熟であるため、広範な民主主義を擁護する勢力全体を結集して極右民族主義の跋扈を食い止め、民主主義を守ろうという戦術である。この点でこれは、レーニン・トロツキーが出した統一戦線戦術やトロツキーの過渡的綱領の延長線上にあるものと言えよう。

●資本主義から社会主義への移行は暴力革命なのか？

しかし保守派との連携を、このような戦術レベルの問題としてとらえると問題を矮小化する危険がある。

左翼は歴史的に、資本主義から社会主義への移行は、民衆の武装蜂起による暴力革命によって国家権力を奪取することによってプロレタリアートの革命的独裁を樹立することによってはじまると理解してきた。これはマルクスの革命テーゼである「共産党宣言」が高らかに唄ったものだ。

しかし「共産党宣言」は、1848年の、フランス・ベルギー・ドイツなどのヨーロッパ諸国の革命に対するマルクスのテーゼであり、それ自身が歴史的に限定された性格を持っている。

すなわちマルクスは、これらの国々ではブルジョアジーの

力がまだ弱いため、彼らは封建的貴族に依存しがちであるため、彼らは徹底して民主主義革命を推進できない。そしてすでにこれらの諸国でも資本主義的生産関係は拡大している中で、ブルジョアジーの背後には、徹底した民主主義の拡大を唱える労働者階級が成立している。したがってこれらの国々における来るべき市民革命は労働者階級の主導権のもとによってしかなしえず、彼らの武装蜂起によって強行的に国家権力を奪取する社会主義革命にただちに移行できなければ、市民革命すら完遂できないと考えたものであった。

マルクスのこのアイデアは、18世紀後期のフランス大革命の推移の歴史的分析に基づいている。

フランス大革命はまさしくマルクスが1848年革命について考えたような勢力関係で起きており、だからこそフランスでは市民の武装蜂起によってしか、民主主義の拡大はありえなかった。

だが1848年革命はマルクスの予測を完全に裏切り、ブルジョアジーと連携した封建貴族たちは民主主義革命をなすとげ、以後ヨーロッパ規模で資本主義的生産関係は急速に発展し、社会主義ヨーロッパではなく、資本主義ヨーロッパの繁栄の世紀が始まった。

マルクスはこれ以後、自身の「共産党宣言」での予測がなぜ裏切られたかを研究した。

その結果わかったことは、資本主義は一国の内部で発展するのではなく、国民国家を超えて、少なくともヨーロッパ規

模での経済関係を基盤としてしか発展できないもので、そのため、先進資本主義国であるイギリス以外の西欧諸国でも資本主義的生産関係が主流となり、各国の封建貴族すら、資本主義的生産関係に依拠しないとその力を保てない状態になっていたことがあきらかとなる。そのよい例は、ドイツの封建貴族たる大地主ユニカーは、自身の封建的領地における商業的農業の展開により、ヨーロッパ規模での資本主義的生産関係に依存していた。だからかれら自身も、資本主義的生産関係のさらなる発展の基盤となる、社会の民主主義的改革を推進することに利益を見出していたのである。

このため1848年革命は、マルクスの予測を裏切つて、ブルジョアジーと封建貴族の連合戦線によって各国で市民革命として完遂された。

ここからマルクスは資本主義的生産関係の歴史的品格とその今後の発展のコースを予測する研究にはいり（この成果が、「経済学批判」であり、「資本論」である）、この分析に基づいて、あらたな資本主義から社会主義への移行の過程に関するテーゼを作るための作業に入った。しかしこのテーゼは未完であり、まとまった文章とはなっておらず、「経済学批判」や「資本論」そしてこれらの分析に基づいたマルクスの以後の著作の中に断片的に存在するだけであり、マルクス自身も以後も、「プロレタリアートの革命的独裁」なる用語を、資本主義から社会主義への過渡期の時代の国家性格の問題として使用し続けたために、あたかもマルクスが「共産党宣言」の

テーゼを以後も擁護し続けたかのごとく、マルクスの弟子たちには勘違いした。

「経済学批判」や「資本論」を読む限り、マルクスはこの移行の問題を、暴力革命ではなく、絶えざる民主主義的改革の連続による革命的变化としてとらえていると思えない。

このことを示す言葉として、「経済学批判」の序言にある、「いかなる社会経済体制もそれ自身の内部から、それ自身に代わる新しい社会経済体制が生まれ出て、それにとつてかわる状態にならないかぎり、退場することはありえない」（文は不正確。僕自身の言葉に変わっている）があるし、「資本論」の中でマルクスが、株式会社制度を評して、これは資本の社会化の過程の一つであり、資本が資本家の私有財産であったことから、資本が社会的所有に変化する過渡期のものだと呼び出したことも、資本主義的経済関係の中で、社会主義的生産関係が生まれ出て成長することによって、社会変革はなるといふ彼の新たなテーゼの一部であると考えられる。

「資本論」では、社会主義はもつとも発展した資本主義のもとでしか成立しないと理解される。

これを左翼は、革命は先進資本主義国でしか成立しないと理解することが多いが、そうではないと思う。

資本主義的生産関係が支配的な社会の中に、資本主義それ自身の発展によって、たかさんの「社会的共同」の場、すなわち社会主義的場が出来ていくし、それを促進して築き上げていくことで、それがやがて社会主義的な社会に変化させるこ

とが可能だと言いたいのだと思う。

新たな未完の「テーゼ」を一番よく示しているのは、1875年の「ゴータ綱領批判」だと思う。

マルクスはここでドイツ労働者党の綱領の在り方としての綱領（草案）はブルジョア民主主義への屈服だと評価して、あるべき綱領を示している。

この中で特徴的なのは、労働者階級は社会変革の闘いの一つとして「協同組合的生産の条件を社会的規模で樹立すること」を挙げていることである。労働者を単なる労働の所有者ではなく生産手段の所有者に変えることは、社会を社会主義的に変えていく基盤だとしていることである。

そしてもう一つ特徴的なのが、国家形態の問題において「民主共和国こそが階級闘争が最終的に決定的に闘われる」としていること。これは、その結果として成立する過渡期の政治形態を「プロレタリアートの革命的独裁」と表現はしているも、これが暴力革命によるとは書いていないことが特徴的である。

マルクスの時代は、西欧では、市民革命と資本主義的諸関係の拡大によって、封建的諸関係だけではなく、村落共同体や町における職業的ギルドなど、社会の基礎をなしていた「小さな共同体」が次々と解体され、このために、政治的には代議制民主主義が拡大しても、個々人にアトム化されてしまった諸個人は、社会的勢力として政治に参加できなくなってきた。このために、ブルジョアジーのように社会的に大きな勢

力を持っていない諸階級は、政治的には無に等しい存在となり、ために市民革命で期待された、社会のより一層の民主主義化、言い換えれば一層の平等化が進まず、あらたな差別すら拡大した。この状況を変化させ、より一層の民主主義化を進めるためには、社会を変えるための新たな「小さな共同体」をつくりあげ、それに依拠した社会的力によつて政治も動かし、社会を変えることが問題意識として挙げられた時代である。

この「小さな共同体」は、「コミュニティ」と言われた。

マルクスはこのコミュニティの一つとして、労働者階級自身の社会変革のためのコミュニティとして、労働組合や労働者生産共同体を考えたのである。

つまり労働組合や労働者生産共同体という社会的共同の場を、国家社会をより民主主義化することで法的にも認知させ、拡大することによつて、社会をより社会主義的に変えるという構想を立てたのだと思う。だからこそ「民主共和国」こそ階級闘争の最終局面が闘われる場だとしたのだし、「協同組合的生産の場」を広げることが労働者党の綱領としたのだ。

●保守派との連携は社会を変える戦略

こう考えてくれば19世紀後半から1929年恐慌という資本主義の矛盾が明らかに成ってきた段階で、保守派の中に、アメリカでは「革新主義」と命名された、社会をより民主主義的に変革し、自由と平等の両立が可能となるような社会に

変えようという保守主義、いわゆる「穏健な保守主義」が生まれた。この「穏健な保守主義」との連携は、社会を民主主義的に不断に改革し、社会主義的なものへと変えていく闘いにおいて、戦略的な問題である。

「穏健な保守主義」は、民主主義の問題を単なる政治制度とはとらえず、社会の中により民主主義を広める、つまり社会の中に社会的共同の場を広め、そこにおける自治を広めることによつて、社会をより自由で平等のものにしようとする傾向を容認する。

したがってアメリカにおいて、トロツキーの「死の苦悶の資本主義」観、つまり革命間近との考え方に基づいて、この革新主義を標榜したアメリカ民主党とアメリカ社会労働者党が連携しなかったことに、アメリカトロツキストの敗北の原因がある。そしてこれ以後アメリカにおいて生き残った左翼は、社会において何らかの「社会的共同」の場を形成しえた人々だけであることも特徴的である（これは日本でも同様）。日本においても、労働組合の承認や労働立法を行つて社会を民主主義的に変えようとした民政党と共産党も含めた労働者党が連携しなかったことも、ファシズムが権力を握ることを許した背景である。

人民戦線のときに社会民主党や共産党が連携した保守派とは、このような「穏健な保守主義」であった。資本主義の危機の時代となる局面では、民主主義を破壊することで、労働者などに与えた権利を解体することで、資本の独占的利益を

保証しようとする勢力が現れる。これが極右民族主義・国粹主義である。危機だからこそ、国家社会の在り方が問題となる。

第二次世界大戦後の先進資本主義諸国の政治体制は、この「穏健な保守主義」と社会民主主義の連携で推進され、社会を多くの側面で民主主義的に改革し、社会をより自由で平等なものに変え、そこで明らかとなった差別に対する新たな闘争が発展していった。しかし1985年以後、世界資本主義の危機が顕在化する中で、民主主義の破壊により資本の利益を極大化しようとする勢力が現れた。これが新保守主義と呼ばれるもので、安倍自民党もこの流れの中にある。しかしこれは保守主義とは名乗っていても、正確には極右民族主義である。

新保守主義と対抗し、戦後の成果である民主主義を守りさらにこれを発展しようとする保守勢力との連携は、社会により多くの「社会的共同」の場を建設し、自由と平等を推進するより民主主義的な社会へと変える戦略としてとらえるべきだと思う。(2014. 3. 20)

これがマルクス主義が如何にして間違ってきたかについての現在の私の見解であり、今後左翼は社会で如何に動くべきかについての私の考えである。

私が左翼になったわけ

ではなぜこのような認識に達したのか。実はこれについても昨年以下のような文章を書いた。これは同時代社の社長(当時)川上徹氏への手紙である。【一部分はこの文を書いた時点での補足です。

ご著書「戦後左翼の誕生と衰亡」をお送りいただきありがとうございます。

皆さんほとんどが、社会的運動の波に心を動かされて左翼としての人生を歩み始めたのですね。私自身とのあまりの違いにびっくりしています。

ちなみになぜ私が左翼になったのか書いてみましょう。

左翼になったときも、そして今も、左翼になってもそこではいつも異邦人だったと感じています。

僕が左翼になったのは、1975年、25歳のとき。ある政治組織の下部組織の青年同盟結成に参加したときです。直接的には、すでに同盟員になった弟からオルグを受けたことと、すでに本を読んで知っていたトロツキーの作った組織が日本にもあるのかと知ったからでした。

僕とマルクス主義との出会いは、1969年。大学入学の年でした。

一浪して国学院大学文学部史学科に入学し、大学法阻止のための全学ストライキのためにクラスをオルグしに来た自治

会の活動家（革マル派）の尊大な態度が気に入らず、彼らとの論争に勝つために、彼らのバックボーンとなっている思想を学ぼうとしたことによります。

それまでの僕自身は、とくに政治に関心はありませんでした。

ベトナムの闘いを見聞きし、他国を自国の利益のために思いのままにしようとするアメリカの横暴はおかしいと考え、ゲリラの闘いぶりのすごさに感動はしても、ゲリラ戦を戦う一国民を相手にして勝利した国はないという歴史的事実（日中戦争の八路軍との戦い、ナチスドイツに対するソ連のバルチザンの闘いしかりです）に鑑みてみれば、アメリカが敗北することは必然と考えていたので、とくにこの闘いに連帯して何かをしようとは考えませんでした。私がいた県立川崎高校の横を走る南武線の支線・浜川崎線は、米軍のジェット燃料が輸送されるところで、これに対して生徒会執行部から燃料輸送阻止のデモ参加が提案されても行きもしませんでした。また三里塚の農民の空港建設反対運動を見聞きしても、農民の命である農地を取り上げる国家の理不尽さに憤慨しても、それを支援しようとは思いませんでした。同じことは水俣の闘いについても同じです。このころから歴史家になろうと決めていた僕は、学業と大好きな音楽（音楽部弦楽合奏団でヴァイオリンを弾いていた）にのめりこんでいたからです。

ただ一つ政治を感じたとすれば、世界史を指導していた教員（共産党員）が、フランス革命を、生徒自身が分担して調

べて討論によって学ぼうという課題を出したとき、この革命がどのようなして起き、どのように推移したのかを、通常の世界史の授業では学べないほど詳しく学べたときです。このときの感想は、どうして市民の武装蜂起が必要だったのかという疑問です。考えてみればこれが政治に少し興味を持った最初です。

東大安田講堂の攻防はテレビで見えていました。

どうして学生は立てこもる必要があるのか。どうして大学はこれを機動隊導入で排除するのか。話し合いで解決策はないのか。これがテレビ見ているの感想です。

一浪して大学にはいったとき、同時に合格していたのは中央大学の史学科でしたが、ちやうど全学ロックアウトの状態です。これでは勉強は無理だと思ったので、国学院にしたのです。歴史を研究したい、とくにシルクロードを通じた東西文化交流に興味のあった私は、東西文化交流史の唐時代の権威である石田幹之助氏が教授をしていた国学院史学科の東洋史専攻のほうの魅力があったのです。

大学に入って魅力的だった講義は、宗教学者の西田長男氏の「神道概論」。【西田氏の講義で今も記憶に残ったことは、国家神道は神道ではないという言葉。神道は、八百万の神という言葉に象徴的なように、森羅万象がみな神であるという、アニミズムというもつとも初期の宗教の在り方を残した素朴なもの。国家神道は天皇教だ。近代日本が欧米の侵略に対抗するために統一国家を作る際、国民統合のイデオロギ

ーとして作り上げたもので、宗教ではないと。】

さらにここではじめて宗教社会学という学問があることを知り、その巨人としてのマックス・ヴェーバーと彼の著作を紹介されました。「資本主義の精神とプロテスタンティズム」も読みましたし、彼の主著「経済と社会」も読破しました。

ここで学んだのは、人間の歴史は人間自身の力で動くということ。人の思想が大きな力を持っているということでした。マックス・ヴェーバーを先に読んでいたので、マルクス理解も違ったのでしようね。社会を上部構造と下部構造に分けて、下部構造が思想も支配するなんて論をのちに読んだ時、あまりの形式主義にビックリしました。マルクスはこんなこと言っていないよねと。

もともと国学院も入学してすぐに学生間の闘争（左翼と右翼）が激しくなり学内で衝突が繰り返され、1年の冬でしたかね、学生大会に右翼が武装して突入し、代議員全員が講堂に閉じ込められ、一人ひとり首実検され、その中の左翼活動家がボコボコにされるといふ事件が勃発。このためたった二日でしたが、学校がロックアウトされたのでした。

この時国学院大学自治会を牛耳っていたのが革マル派でした。

オルグに來た活動家の態度が高慢で自身が選ばれた人という感じで学生に対することが頭にきて討論したが、見事に粉砕された。頭に来たので論破してやろうと思ひ、彼らがマル

クス主義というのに依拠していると聞いたので、早速渋谷の大盛堂書店に行き、岩波文庫でマルクスとエンゲルスの著作を物色しました。目に付いたのが、「ドイツ農民戦争」とマルクスのフランス三部作。やはり歴史を専攻している性でしょうか。これに目が行きました。1969年の秋のこと。

そしてびっくりしたのは、「ドイツ農民戦争」が、それまで読んだどの歴史の本より生き生きと歴史を描写していたことと、さらに驚嘆したのはマルクスの「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」でした。自分の生きている時代の出来事を、どうしてこの人はこんなに生き生きと描写し分析できるのだろうか。その秘密を知りたいと思いました。

彼らの歴史観は弁証法的唯物論というのだとわかったので、以後この勉強にはいり、関連の本を読みまくった。その中でオルグに來た活動家のマルクス理解がどこかおかしいという印象を持ち、以後誰にも教わらずにマルクスの本を読みあさる毎日でした。これが一年くらい続いたかも。

1969年の冬から1970年の春には、マルクスの「資本論」とトロツキーの「ロシア革命史」を同時進行で読みました。

「資本論」を読んでみて、ここでマルクスが資本主義の未來像として示したものが、現代資本主義そのものであることにびっくりし、印象としては、資本主義の中から社会主義的なものが生まれ、その新しい社会組織が資本主義的経済関係

を内部から食い破って社会全体を覆った時、社会主義になると理解しました。そう、僕は暴力革命をマルクスが唱道しているとは理解しませんでした。

なんと自己流で興味に従って読んでいた僕は、「共産党宣言」は読みませんでした。「宣言」という書名に胡散臭いものを感じたからでしょう。「ドイツ農民戦争」や「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」は歴史書という匂いを持っていますが、そして前者は歴史書で後者は同時代史です。これに対して「宣言」は政治文書の匂いがプンプン。まさにそうなのですが。】そして同時にレーニンを全く読まずにいたので、暴力革命のための前衛党・革命党という概念は思いもよらないものでした。【やはり政治には興味がなかったのでしょうか。レーニンはまさしくロシア革命を成し遂げた人物ですから。】このとき読んだトロツキーは、ジャーナリストであり歴史家としてのトロツキーに驚嘆していたのであって、革命家としての彼やその戦略にはほとんど興味がわきませんでした（革命家としてのトロツキーの生涯は、ドイツチャーの三部作を読んでからでした）。【トロツキーもロシア革命の指導者であることは知っていた。でも「ロシア革命史」の書名は、そしてその中身も、歴史書そのものです。マルクスの前著もそうですが、この本も同時代の、しかも自身が関わった歴史的事件を生き生きと描写しかつ深く知的に分析しているのです。この本を読んですます、彼らが依拠している史的唯物論・弁証法的唯物論という分析方法のすごさを感じ、これを

身につけなければという気にさせられました。なぜなら彼らの書いた「歴史書」は、私が知っているどの歴史書よりも生き生きとした躍動的な描写で、しかも歴史的イベントを引き起こしている諸要因がしっかり浮き彫りにされていた。歴史分析と描写はこうでなくては。一歴史学徒としての感想です。】僕のマルクスとの出会いはこういうもの。

友人が自治会の活動家になった関係で何回かデモにも参加しましたが、ただ単に激しいデモをするだけで、マスプロ教育と化した大学の中で、真に学問研究をするのではなく、一方的な講義だけでゼミすらない環境に不満を持っている学生の要求を取り上げることもせず、ただ単に大学当局を攻撃し、同調する学生を街頭闘争に動員するだけの党派（革マルだけではなく、中核もいましたし民青もいました）が、みんな同類に見えました）には嫌気がさしました。だから彼らとは離れて図書館で研究に浸る毎日でした。

この本で述べられた皆さんとは大いに違います。そして組織に属することは、大学4年間ではなく、むしろ独自にグループを形成する方向に進みました。それも研究会。

自分自身も研究テーマを立てました。それは、市民革命とは何か、社会主義革命とは何か。すでに起きた歴史的な革命を詳しく研究してそれを明らかにしてみようというものでした。取り組んだのは17世紀のイギリ

スの二つの革命、18世紀から19世紀にいたる、フランスの大革命と7月・2月革命。さらにドイツ2月革命と、1918年の革命。そして明治維新。つまり歴史的な市民革命を調べてみた。さらにロシアの20世紀の二つの革命。そして中国の20世紀の三つの革命。そしてキューバ革命。

やってみて不思議だったのは、なぜ社会主義革命は市民革命と違って、社会革命が政治革命に先行しないのかという疑問がでてきたこと。市民革命のように、封建社会の中で資本主義的生産関係が拡大し、そのさらなる発展には封建制度がじゃまになって市民革命という政治革命で、社会が資本主義拡大のものに変えられる。社会主義も同じようにならないといけないのではないのか。資本主義的生産関係が主流である社会の中で、社会主義的な諸関係が形成され、それが社会的に主流となる中で、最期にこれを確定するために政治革命が起きるといふ形に。

歴史的に研究してみても、社会主義革命が、暴力的に政治権力を奪取するというイメージはわいてこなかったのです。

そしてもうひとつ、市民革命の中でどうしてフランスだけが民衆の武装蜂起を必要としたのかということ。これはロシアの1905年の革命や1917年2月革命でも同じですね。イギリスや日本の明治維新では民衆の武装蜂起はない。民衆は革命を外から見ていた。イギリスでも日本でも封建的な騎士・貴族階級同士が、革命派反革命派にわかれて闘争して革命はおきた。

この不思議を、イギリス・フランス・ロシア・日本のそれぞれの封建社会を研究して一つの結論が出た（フランスについては二年の時の「フランスアンシャン・レジーム」という講義がとても参考になった）。

イギリスや日本は、社会がすでに資本主義的生産諸関係で成り立ち、貴族までもがその中で生きていただけではなく、極めて民主主義的諸制度が発展したので、ここでの政治革命は、誰が権力を握るかが課題であって、社会を変革するものではなかった。だから闘いは支配階級内の闘いになり、資本家や労働者や農民は蚊帳の外。

でもすでに資本主義的生産関係が拡大していたフランスやロシアは、まだそこに飲み込まれていない強大な封建勢力が存在した。資本家の力も弱いし、資本主義に関与した貴族も弱い。イギリスもしくは西欧に発展した資本主義に飲み込まれる中で国家的自立を図るためにも、国家の主導の下で、民族国家内に資本主義を急速に発展させなければならぬ。このため民主主義を拡大することを阻止する封建領主を打倒する必要があるのだが、資本家も資本主義的貴族も弱体のため、彼らを押し上げて断固たる闘争に入らせるために民衆の武装蜂起が何度も必要だった。

市民革命における民衆の武装蜂起の有無の背景をこう理解したのです。

ロシア1917年革命が市民革命から社会主義革命に移行してしまっただけなのは、ロシアが遅れている、民主主義が発展し

ていないし、資本主義の発展も不十分だったから（これは中国もおなじ）。でも遅れた資本主義の下では社会主義には移行できない。先進資本主義国で社会主義への移行が出来ない以上、出来てしまった労働者国家は、官僚の下で自衛武装するしかない。資本主義諸国の攻撃に囲まれた中では。

この理解はトロツキーの「失われた革命」の影響ですね。

仲間を募つての研究会は、「教育を考える会」。史学科の中で教職課程を取っている人を対象に、十数人で結成。やってみたことは中学校の歴史教科書の批判検討をしてみても、歴史を学ぶとはどういうことなのかを論議しました。そしてこの研究会の延長上に、3年のときには代議員選挙に数人で立候補して史学科は占拠し、ゼミの設置などの改革案をひっさげて学生大会に臨みましたが、左右の党派対立が激しい中で、こうした問題は顧みられず、何もできませんでした。

しかしこうやっていろいろ論議してみると、今の日本がどう成り立っているのかがとても気になり、どうしても明治維新後の日本を研究したくなりました。

しかし東洋史専攻ですから、これを論題にすることができません。

ちょうど高松塚古墳が発見され、渡来人論争が激化していたので、渡来人問題を中心とした日本古代史・古代日朝関係の研究が、いかに明治維新以後において論争がゆがめられてきたかをテーマにして卒論は出しました。

そして教師になるべく試験を受けたが落ちてしまい、一年間就職浪人することになったのですが、この浪人の一年も含めて、僕の研究テーマは明治維新論とそれ以後の明治国家形成史となっていく、教師となつてからもこれが一貫した研究テーマになり、今に至っているわけです。（教師になつて何をしたかは、長くなるので割愛。僕のサイトの「コアラの年図」をみるとよくわかると思います。）

教師の道を選んだのは、一つは高校時代の弟が党派の書いた教育論を持ってきて、ここでは公教育への疑問が濃厚であったこと。そして農民の農地を無理やり強制収容するのは憲法違反であり、公共の福祉という論理は、一部の独占資本の利益を優先するための隠れ蓑だという本に出会ったことにあると思います。

公共を錦の御旗にして、実は一部の利益が図られていることへの疑問。

そして教育は、本来は一人ひとりの人間の自立の力をつけるものなのに、国家社会に役立つ人間にするという名目で、実は内部では差別がおこなわれ、勉強ができない馬鹿とされた下層の生徒は、奴隷根性と人を差別する心だけが受けつけられているのではないかということへの疑問。

教育がこの差別社会を維持する社会装置だとしたら、それを内部からその反対物に変えてやろう。これが教師の道を選んだ動機だったと思います。

トロツキーは、中国革命論だけ読みました。中国革命を理解するために。

そして中国は資本主義の発展が不十分で労働者階級が大きいから、トロツキーの戦略も実現不能だと思いました。だから僕にとつてのトロツキーは、早すぎた社会主義革命を守るために、先進資本主義国を一刻も早く社会主義へ移行させようと尽力しようとした人とのイメージで、革命家というイメージではなかった。

だからのちにインターに入って彼の過渡的綱領を読んだ時には、これを革命綱領ととらえるのではなく、資本主義の中で社会主義的な組織と場をいかに拡大し、その中で人々の意識をどう変えるかという方法と読みました。インターの世界の文献の中では、マンデルの「労働者自主管理」が面白かった。資本主義の中にどう社会主義的組織と考え方を拡大していくのかというものとして。

このため1975年に日本共産青年同盟に入り、インターの機関紙誌を読んだ時の違和感は大きかった。

そこには日本社会の現状に対する分析はほとんどなく、どのようにして人々の意識を変えていくのかという観点はまったくなかった。そして資本主義の中に社会主義的な諸関係、たとえば労働者生産共同体みたいなものをどう拡大していくかという観点もありませんでした。ただただ政治闘争あるの

み。大衆を街頭に動員することのみ。

ただし一部にこれと違う傾向がありました。労働運動と社会運動を重視する傾向が。

違和感だけが募りました。

だから1978年の三里塚3・26闘争も、あまりの一揆主義・急進主義に辟易し、反対の論陣をはりました。

僕は教師ですから、学校をどう改革するか。国家社会のための人材を作る場ではなく、どうやって一人ひとりの人間が自立してものを考えられる人になれるようにするかという場、どうやって変えるのか。このために主任制度が導入されようとしている現在、これに対する反対闘争が起きているが、これをどう利用して、学校を変えるのか。これには授業の在り方も行事の在り方も変えねばならないが、生徒主体の学校に変えるには、この思想をもった教師集団が、集団として学校を運営することが必要であるので、職員会議を最高決定機関とする教員の学校自習管理が必要だと訴えました。

でも多勢に無勢。

論争に勝てないので、しかたがないから闘争には行きませんが、予想どおり、戦術的には一時的に勝利を収めたものの、闘争を勝利に導くために、どうやって国家の強制収用を辞めさせ農地守るのかの戦略もない闘いは、最終的に敗北するの

は当たり前でした。

この闘争の敗北をきっかけとしてインターの内部に激しい論争がおき、その中で僕は、社会運動を強化するしかない

という見解をもつ人々の一員として、正規同盟員になって動きました。

この過程で初めて必読文献というのがあることをしり、初めて「共産党宣言」を読んで、僕のマルクス理解と全く異なることに気づき、これは歴史的に敗北した革命のテーゼであり、これを金科玉条とする左翼そのものが、その存在の根本から間違っていると感じました。またこのとき初めてレーニンの「国家と革命」を読み、これはロシアという民主主義がない国での論であってこれを普遍化してはいけないなど感じ、彼の「帝国主義論」も、資本主義は終わりだと言っているけど、それから半世紀以上資本主義は繁栄を謳歌しているのに、どうしてこの論の予想が違ったにもかかわらずこれを見直さないのだろうかKという疑問ばかりが出てきました。80年代の初めから中ごろのことです。

インターを離れたのは、その数年後。

そして分解したインターの中で、もともと社会運動派であった人々が小さなグループを作ったと聞き、ここに参加して今に至っています。

2014年3月20日

川瀬

川上徹さまへ

●メルトの中での総括運動の進展

この小グループの正式名称は「第四インターナショナル日本支部再建準備グループ」。1988年に第四インターナショナル日本支部が四つのグループに分裂し、その主たるグループが国際執行機関に対して「日本支部」を返上してしまったので、これを再建するための組織として作られたものです。ですがその後内部で、1999年から2003年までの三期にわたるマルクス主義の歴史的総括をする中で、現代は資本主義の危機の時代にあるという現状認識と、そこからの社会主義への移行は暴力革命によってなされるというマルクス主義の認識の双方が間違いなのではないかとの結論に達しました。さらにそこから2003年に始まる戦後思想の総括的点検を媒介にして、日本における左翼運動（主として戦後）の歴史的総括を行い、その成果として、2006年には「戦後左翼はなぜ解体したのか―変革主体再生への展望を探る」と「第四インター日本支部はなぜ解体したのか―社会革命とロシア革命史観の再検討」を相次いで出版し、さらに2010年には「20世紀社会主義の挫折とアメリカ型資本主義の終焉―左翼再構築の視座を求めて―」を出版し、これまでの総括作業の成果を示しました。その結果、現代資本主義は崩壊に直面した危機に陥っているのではなくその発展の行き詰まりから新たな社会へ向かって移行し始めているとの認識が得られ、ここから世界革命を標榜する第四インターナショナル

が存在する基盤も意味もすでに無く、世界的に見ても各国組織は崩壊しつつあるとの認識に達しました。そこで2011年2月に「第四インターナショナル日本支部再建準備グループ」の名称を捨て、それでもなおマルクス・エンゲルスから始まり、レーニンやトロツキーに至るマルクス主義の伝統を継承しつつ現代社会を分析しかつその変化に寄与して行こうとの思いから、組織の名称を変更して「政治グループ・MELT」と変更しました。略称「MELT」です。

これは、マルクス・エンゲルス、そしてレーニンとトロツキーの思想を正しく継承するものだと自己認識に基づき、この四人の頭文字をとって、MELT、すなわちメルトと名乗ったわけです。

しかしこのグループ活動の成果である「20世紀社会主義の挫折とアメリカ型資本主義の終焉―左翼再構築の視座を求めて―」もかなり不十分であいまいなものでした。

この事について私は、2010年8月にその機関誌インターナショナルに次のように書きました。すこし長いですが、そのまま引用します。

【書評】「20世紀社会主義の挫折とアメリカ型資本主義の終焉」寺岡衛著・江藤正修編、つげ書房新社刊

明確な暴力革命論との決別の姿勢

―注目すべき20世紀社会主義運動の総括―

(インターナショナル第196号…2010年8月号掲載)

▼本書の主題は何か？

本書の主題は三つある。

一つは、20世紀社会主義運動の敗北の歴史を総括し、その理由を20世紀社会主義運動が依拠してきたマルクス主義の革命論が、マルクスが「経済学批判序言」で述べたテーゼに反していたのではないかという観点から考察することによって、マルクス主義革命論の再構築を図ることである。

そして二つ目の主題は、この同じテーゼによって、2009年9月のリーマンショック以来混乱を極めている戦後のアメリカ的な資本主義、寺岡が言うところの後期資本主義、大量生産大量消費のフォードイズム型の資本主義の衰退によって、資本主義社会の生命力は尽きたのかどうかを考察することである。

そして三つ目の主題は、以上の考察に基づいて新たな社会・社会主義社会に向かう変革の道筋とそれを担う主体はどのように形成されるのかを考察することである。

したがってこの三つの課題を総括的に言葉にすれば、本書の表題の副題である「左翼再構築の視座を求めて」ということになる。

▼暴力革命を否定したマルクスの経済学批判序言のテーゼ

では、寺岡が「左翼再構築の視座」の基礎にすえたマルクスの「経済学批判序言」のテーゼとは、如何なるものか。それは、

「一つの社会構成体は、それが生産諸力にとって十分に余地を持ち、この生産諸力がすべて発展しきるまでは、決して没落するものではなく、新しい、更に高度な生産関係は、その物質的存在条件が、古い社会自体の体内で孵化されてしまうまでは、決して古いものに代わることはない」(p116)というものだ。

マルクスとエンゲルスは「共産党宣言」において、1848年のヨーロッパ革命を次のように予測していた。

1848年のフランスとドイツの民主主義革命は、イギリスにおける反資本主義闘争と結びついてヨーロッパ規模での社会主義革命へと発展すると。つまりマルクスとエンゲルスは、資本主義発展の不均等のために、フランスとドイツの民主主義革命は、それを推進する主体が労働者階級であることで社会主義的性格を持ち、これとイギリスの反資本主義的闘争が結びついて、ヨーロッパ規模で民主主義革命が社会主義的革命へと複合的に発展していくという「永久革命論」を提唱した。

しかしこの予測は完全に外れた。すなわち1848年のフランスの2月革命とドイツの3月革命に於いては、マルクスとエンゲルスが民主主義革命に敵対すると予想したブルジョ

アも貴族とともに民主主義革命を支持し、その結果ヨーロッパ規模で民主主義国家が成立したことを背景として、産業資本主義が爆発的に発展して行ったのである。

資本主義はマルクス・エンゲルスの予測に反して、その生命力を使い尽くしていなかったばかりではなく、すでに遅れたフランスやドイツをもその中に包摂しつくしており、すでに支配的な新たな生産関係となっていたのだ。そしてより広範な地域での民主主義的国民国家の発展と全ヨーロッパ市場の形成は、資本主義のさらなる発展の揺り籠となったのだ。

この革命の総括からマルクスは、資本主義とは何かということ深く歴史的経済学的に考察する必要を感じて資本論の研究に入っていく、その過程の1859年に「経済学批判」を公刊するにあたって、1848年革命の総括として導き出された前記のテーゼを序言に掲載し、何ゆえ経済学的研究が革命のために必要なかを述べた。

言い換えれば、「経済学批判序言」のテーゼが資本論の依拠する前提であり、資本論の考察を経てこのテーゼはさらに深化させられ、「共産党宣言」に代わる新たなマルクス主義革命論が構築されるはずだったのだ。

しかしこれが、マルクスの手で文章化されることはなかった。それは、1870年のパリコミューンに対する彼の対応の中に仄見える程度でしかない。

だが序言のテーゼの言う所は明確である。マルクス・エン

ゲルスの「共産党宣言」で表明された革命論は、ヨーロッパ資本主義社会の体内でいまだ社会主義的生産関係の物質的基盤が成長しておらず、資本主義そのものがまだ生産力のさらなる発展を保障する余力を持っている段階で、無理やり暴力的にそれを強行突破しようとした点で間違っていた。従って社会主義社会への移行は、資本主義社会の中で社会主義的生産関係の物質的基盤が生れ落ちて育ち、それが資本主義社会の枠組みと衝突しはじめないかぎり起こりえないと、このテーゼは述べているのだ。

そして社会主義とは、より民主主義の発展した状態を言い、人と人との関係が支配・従属関係ではなく、それぞれの自己決定と協同関係によってなりたつ新たな平等で自由な関係だと考えられていたのだから、資本主義から社会主義への移行は、資本主義社会の中で自主・自己決定の民主主義的基盤が発展し、社会の主導権が資本家や国家の手から、より広範な人々に移譲され、その多数者の同意を得て次第に体制が変化していくという、言い換えれば社会の民主主義的改革の連続によって実現できるのである。

こう考えてくれば、このテーゼは暴力革命論を明確に否定した物といえるのだが、マルクス・エンゲルスの弟子たちはこのようには考えず、旧来の暴力革命を信奉する左派（これが後に共産党となる）と、資本主義の拡大に依拠して議会主義的な改良によって労働者の生活を改善することを目的とする右派・社会民主主義派に分裂していった。

だがこの序言のテーゼは以後マルクス・エンゲルスの弟子たちに重くのしかかり、暴力革命論の継承者であったレーニンやトロツキーも、常に自分たちの理論や行動がこれに反していないのかどうか考察していたことはよく知られたことがある。

▼新たな資本主義としての後期資本主義—寺岡の現代資本主義分析の基礎認識—

後に1920〜30年代にトロツキーは、崩壊しつつあったヨーロッパ資本主義をアメリカ資本主義が救済したがゆえにヨーロッパ革命が頓挫した事態に直面する中で、これは資本主義の生命力がまだ枯渇していないことを意味するのかどうか判断することを迫られた。

結局この時のトロツキーの判断は、アメリカの資本主義はヨーロッパのそれとは異なる新たな性格を持つてはいるが、それが世界を組織しようとしてかえって資本主義世界の矛盾を内部に抱え込み、結局は死の苦悶の資本主義に飲み込まれて終焉すると予測し、社会民主主義と組んで（アメリカと組んで）反ファシズム人民戦線に動いたソ連邦と第三インターナショナルに対抗して、「ヨーロッパ合衆国」を掲げる第四インターナショナルを結成して世界革命を目指した。しかし、第二次世界大戦の中から世界革命は立ち現れず、世界はアメリカ型の資本主義に再組織され、空前の繁栄を誇ったことは

諸人が確認する事実である。

つまりここでもマルクスの先のテーゼは正しかった。資本主義はいまだその生命力を使い果たしてはいなかったのだ。

寺岡はこの事実に基づき、アメリカ型資本主義を、利益のために労働者階級を犠牲にして国内市場を狭隘化し、結果として植民地超過利潤を求めて世界戦争に至ったヨーロッパ型の資本主義に代わる新たな資本主義として捉え返し、ヨーロッパ型を前期資本主義、アメリカ型を後期資本主義と呼び、大量生産大量消費のシステムの導入によって労働者階級の生活を向上させて国内市場を拡大するとともに、労働者階級をより民主主義化された社会に取り込むことよってなりたつ資本主義のあらたな発展と捉えたのである。

つまり第一次大戦から第二次大戦にいたる時期に死の苦悶に陥っていたのは前期資本主義であり、第二次世界大戦は、前期資本主義の矛盾を暴力的なヨーロッパ統合によって突破しようとしたドイツと、世界を新たな資本主義の下に再組織しようとしたアメリカとの間の戦争であったと寺岡は捉え返したのだ。

従って寺岡が戦後世界を分析しようとするときには、後期資本主義による日本とヨーロッパの再組織の過程をどうとらえるかということと、後期資本主義そのものが抱える内的矛盾の発展と爆発の様が、その重要なポイントとなっている。

ここが、寺岡が世界を認識しようとするときの、従来の左翼と異なるところである。

ここを理解しないと、本書の寺岡の論は理解不能になるのだが、残念ながら寺岡は、この部分を明確に、理論的に論述していない。

これが本書の読みにくい原因の一つである。

▼20世紀社会主義運動の敗北の戦略的根拠―マルクス主義は如何に間違ったのか？―

本書は、このような課題を意識して、寺岡が前著「戦後左翼はなぜ解体したのか」刊行以後に書き綴ったいくつかの論文をまとめた論文集であり、そのため掲載された論文には、上記の三つの目的のいくつかが混在し、それとはつきりわかるように課題が明記されその考察が行われたものではないため、少々読みづらいところがある。

以下、本書の論述に沿って、寺岡がいかに総括し、マルクス主義革命論の誤りをどう抉り出したのかを概観してみよう。

① 死の苦悶の資本主義という認識の誤り

Iの「今日の世界金融危機をどう見るか」の最初の論文「後期資本主義の上昇と衰退、衰退と崩壊」は、主として課題1・20世紀社会主義運動を敗北に追い込んだアメリカ型資本主義の上昇・衰退・崩壊の過程を分析し、この新たな資本主義の性格を明らかにするとともに、現在のその衰退と崩壊の原

因を明らかにする。その上で課題3・新たな変革主体の形成を考察するには、トロツキーの永久革命論、寺岡がトロツキストとして依拠してきた革命論が正しかったのかどうかを吟味しなければならぬと述べ（p.59から62）、20世紀社会主義運動の総括の課題に取り組み必要性を述べたものである。

そしてIの二つ目の「戦間期の政治と経済、今日の危機の源流」は、1の課題の一部、1917年のロシア革命に続いてなぜヨーロッパ社会主義革命が勝利しなかったのかという問題を扱い、結局それは、前期資本主義の危機の表現としてのファシズムをアメリカが中軸となった人民戦線が圧倒し、世界をアメリカ型の後期資本主義に作り変えたからであると結論づけた。つまりレーニンやトロツキーが考えたような資本主義は死の苦悶の状態にあるという認識に誤りがあったのであり、資本主義はその生命力を使い果たしてはいなかったことを指摘した（p.104から107）。

そして1920から30年代のヨーロッパの社会主義運動の敗北の問題を総括するには、マルクスとエンゲルスが「共産党宣言」で定式化した1848年のフランスとドイツの民主主義革命はイギリスにおける反資本主義闘争と結びついてヨーロッパ規模での社会主義革命へと発展するという「永久革命論」は誤りであったと彼ら自身が後に総括した視点に依拠しなければならぬこと、つまりこの総括に基づいてマルクスが経済学批判序言で出したテーゼに依拠すべきことを提起した（p.72から74）の点にある。

言い換えれば、1919年ドイツ革命で「全ての権力をレーテヘ」という、スパルタクス・ブンドの「死の苦悶の資本主義」認識にたったスローガンは、資本主義の安定と民主主義の発展を支持していたドイツ労働者の多数の意識からは乖離していたがゆえに敗北したのだし、トロツキーが1930年代のファシズムとの闘争に際して出した「ヨーロッパ合衆国」のスローガンも、反ファシズム人民戦線に結集し、各国民国家の維持と繁栄、すなわち資本主義の繁栄と民主主義の発展を支持していたヨーロッパ労働者の意識から乖離していたために敗北したのだと寺岡は指摘し、従来の左翼反対派の未成熟論やスターリニストの裏切り史観の誤りを明確に指摘したのである。

②社会主義の基盤の欠如を国家資本主義で強行突破しようとしたロシア革命の誤り

さらにIIの「20世紀社会主義の総括」。

この論文集が取り扱ったのは、ロシア革命によって成立した労働者国家ソ連邦が、なにゆえ東欧民主主義革命⇒ソ連邦の解体という形で崩壊せざるをえなかったのかの考察であり、前半の「ソ連邦の80年と反対派の挫折」は、なぜロシアのように十分には民主主義的基盤が発展していないところで社会主義革命がおきたのかという問題、換言すれば、マルクスが1848年革命敗北の総括に基づいて出したテーゼと資本

論に反して革命が起きたのかという問題を考察したものである。

その結論は、ロシア民主主義革命において労働者階級が主導権を握らざるを得なかったのは、資本主義の不均等発展によるブルジョア階級の脆弱性によって起きたものであり（p 116・117）、¹¹のためソ連邦がその成立のときから孕んでいた矛盾、すなわち革命主体の目的は社会主義建設にあるのに、ロシアの現実的な課題は資本主義的な民主主義の基盤の建設にあるという矛盾が生まれ、その克服の困難さがその後のレーニンやトロツキーの苦闘を生み出し、この矛盾に対応するために取られた諸政策が国家と党の自己決定・民主主義的要求を解体して官僚化を進展させたためにスターリンを押し上げ、社会基盤を失った反対派は解体されたということを詳しく考察したものである（p117から133）。

つまりロシア革命は、マルクスの経済学批判序言のテーゼを強行突破しようとして果せなかったのだということ、寺岡はここで論じたのである。

IIの二つ目の論文、『ソ連東欧の解体と『反官僚政治革命論』』は、一つ目の論文を基礎にして、なぜソ連・東欧においてはトロツキーが予想したような反官僚政治革命が勝利せず、ソ連東欧の解体に至ったのかを論じたものだ。

ここでは、トロツキーが予想したような、国有化と計画経済に基づく急速な工業化は、逆に彼が予想したような民主主義の基盤の拡大には結びつかず、官僚的な上からの計画化は、

受動的な労働者を大量に生み出しただけで、官僚の統制力の強化に帰結した事実を指摘し（p137・138）、結局トロツキーの反官僚政治革命論は、社会革命論をバイパスした経済決定論ではなかったかと総括している（p138から140）。

そしてアメリカ型資本主義によって再組織され、高度に豊かになって民主主義が発展した西欧と、民主主義の発展が官僚的に抑圧され続けた東欧ソ連邦の現状という格差が、ソ連邦東欧崩壊の背景にあったことを指摘した寺岡は、ソ連東欧における反官僚政治革命の敗北とソ連東欧の解体過程を分析することを通じて、マルクスの先のテーゼの正しさを再確認したのだ。

つまり資本主義の十全な発展を基盤として拡大した社会的な民主主義の基盤がないところでは、社会主義建設はありえないと寺岡は考えているのであり、これがマルクスの経済学批判序言のテーゼに依拠しながら、20世紀社会主義運動敗北の総括と現代資本主義の分析を通じて出された、寺岡のマルクス主義革命論再構築の主要テーゼと考えられる。

▼より人間の顔をした資本主義―本書は何を提起しているのか？―

以上のように20世紀社会主義運動の敗北を総括してくる中で、寺岡は、左翼が、アメリカ型資本主義の新たな性格を見誤り、それによる世界の再組織化が、資本主義の新たな発

展を画するものであったことを見誤ったことが、20世紀社会主義運動の敗北の根幹にあったことを示した。

つまり資本主義は死の苦悶にあるというレーニン・トロツキー以来の資本主義認識が根本的に誤っていたのであり、この認識に依拠し、「共産党宣言」に定式化された暴力革命論に依拠した戦いを展開した左翼が、資本主義の高度で広範な拡大と発展の浪に飲み込まれ孤立していったと寺岡は総括したわけである。

では寺岡は、今日のアメリカ型資本主義の衰退をどう捉えているのか。そしてそれからの脱却の道筋をどうとらえているのか。

この点を直接考えているのが、本書のⅠ「今日の世界金融危機をどう見るか」の最初の論文である「後期資本主義の上昇と衰退、衰退と崩壊」であり、その変革主体の形成の問題をあわせて考えたのが、Ⅲの諸論文である。

Ⅰの「後期資本主義の上昇と衰退、衰退と崩壊」では、寺岡は今日のアメリカ型資本主義の崩壊現象を資本主義の終焉とは捉えていないようである。

彼はむしろ今日の事態を、アメリカ型資本主義の抱えた矛盾の爆発、何でも商品化する価値観が社会と激突し始めていると捉えているようである。彼は、「商品的価値観」を脱却して「人間としての平等の価値である人格権や最低の生活のための生存権」を基礎にした、新しい価値観に基づいた「対抗文化」が問われていくと論じている（p48・49）。

またⅢの論文も、同じことを詳しく論じたものである。

Ⅲの「21世紀左翼の構築のために」の最初の論文「国家主導の社会主義論から市民主導の社会主義論へ」は、この本に収録した論文の中で最初に書かれたものであり、この本の三つの課題を総論的に述べたものである。

このため、ここまで本書を読み進めてきた人にとっては、この論文の前半の（1）は、これまでのⅠ・Ⅱで論じた20世紀社会主義運動の敗北の総括の要約的な性格をもつものと捉えられるであろう。そしてこの論文の後半（2）は、寺岡自身の自己総括の歴史であり、これまで述べた認識に至った過程を述べた自史的部分であり、日本共産党を中心とした日本の戦後左翼運動総括への入り口であり、Ⅲのあと二つの論文につながる性格をもっている。

Ⅲの二つ目の論文「新左翼の源流 1968年をどう考えるのか」は、三つ目の論文の「新たな変革主体登場の可能性」とあわせ、今日の世界をどうとらえ、その変革への動きの性格と変革主体のありかたを考察する本書の結論部分であり、ここが今日論議すべき最も大事な論点であろう。

ここで寺岡は、1968年における世界的な「青年の反乱」をとりあげ、それが特に西欧では、前期資本主義を支えた「植民地的な差別や女性差別、そのような古い習慣にどっぷりと浸かっている旧来の市民社会の限界の告発」であったと総括する（p190）とともに、この運動は「市民社会の内的分化と進化として登場したのではなかか」として（p192）、Ⅳの

動きの今後を次のように捉えている。

「1968年の旧来の市民社会を超えようとする流れは、市民社会を否定して登場するのではないと思う。今日までの主流的流れは、アメリカ型の物質的価値観、商品的価値観に基づいて組み立てなおされていく。それは人間を評価する機軸を成果主義や能力主義に求め、物質的な商品価値を生み出す能力があるかどうかで人間の価値が定まっていくなりの商品化の極限化した社会である。その一方で今日登場しつつある新しい流れは、人間の人格、自治や自己決定権として価値観を取り返そうとするものである。このような分化を市民社会の中で進め、新しい大衆的基盤を獲得できるのか。この考え方がアソシエーション論として提起されている」(p

192・193) ㄱ。

つまり寺岡は、今日の事態は資本主義の終焉ではなく、その「商品的価値観」を改め「人間としての平等」の権利に基づいた価値観で社会のあり方を変えていくことが大事だと言っているのだ。換言すれば「より人間の顔をした資本主義」への変革。ということとは寺岡の結論は、革命ではなく、資本主義の民主主義的な改良を意味しているのだろうか。

20世紀社会主義運動の敗北の総括をどう捉えるかということとともに、本書が提起する大きな論点がここであるが、結論はあいまいである。

▼残された課題―概念の正確な把握と歴史的事実に基づいた

議論

本書は、とても刺激的なものであり、その20世紀社会主義運動の敗北の総括は、とても鮮烈なものである。この本は、左翼が共通に基盤としてきたマルクス主義の革命論から階級概念や労働観に至るまで、様々なテーゼの根源的な再検討を迫るものである。

この意味で現代をどうとらえ、どうこの変革に関わっていくかとするのかを考えている人々にとって本書はとても有益である。

*

しかし本書をこのために利用しようとする時、大きな欠陥が三つある。

その一つは、寺岡が概念規定を正確に行わずに恣意的感覚的に概念を操作して論を進めていて、論考が理論的には未整理の状態にあることである。

前期資本主義・後期資本主義という資本主義規定のあいまいさは、その典型である。そしてもう一つは、今後の変革の道筋を論じた諸章でみられることだが、市民革命・ブルジョア革命・政治革命・社会革命の諸概念の混在とその感覚的な使用である。同じく、これは前著の「戦後左翼はなぜ解体したか」でも見られた特徴だが、第一次市民革命・第二次市民

革命・第一次市民社会・第二次市民社会というあいまいな概
念規定である。

これらをきちんと理論的に整理することなくしては、議論
は深化しない。

そして本書の二つ目の問題点は、寺岡がマルクス主義革命
論をどのように再構築しようとしているのかを明確にしてい
ないことである。

すでに見てきたように、寺岡の考察の機軸は、民主主義革
命が社会主義革命に複合発展的に展開していくとしたマルク
ス・エンゲルスの永久革命論（「共産党宣言」の革命論）は誤
りであり、「二つの社会構成体は、それが生産諸力にとつて十
分に余地を持ち、この生産諸力がすべて発展しきるまでは、
決して没落するものではなく、新しい、更に高度な生産関係
は、その物質的存在条件が、古い社会自体の体内で孵化され
てしまうまでは、決して古いものに代わることはない」とし
た新しいテーゼに依拠して資本主義を分析し、それから社会
主義に至る過程も構想すべきであった点にある。

しかしこう考えるのであれば、資本主義から社会主義への
移行は、マルクス主義の従来のものであるような暴力革命によ
るのではなく、資本主義社会の中で孵化した社会主義的諸関
係を基礎にした多数者の合意による資本主義の民主主義的改
革によると考えるべきではないのだろうか。

しかし寺岡のこの論考は、この肝心な点があいまいなので
ある。

さらに本書の三つ目の問題点は歴史認識、とりわけ日本に
おける資本主義と市民社会の発展に関する旧来の歴史認識の、
日本が遅れているとする機械主義的な認識を引きずったまま
のあいまいさである。

寺岡は、日本における資本主義の発展の過程を考察した個
所で次のように述べている。

「明治維新は資本主義へと転換するブルジョア革命であつた
が、市民革命の発展を抑圧し社会（市民）革命を欠落させた
国家革命として展開された」（p214）と。

ここでも概念のあいまいさが目立つが、つまり西欧のブル
ジョア革命は、社会（市民）革命が並行的に発展した、政治
革命と社会革命が結合したものであつたが、日本はそうでは
なく国家主導の政治革命だけであつたと捉えているのであり、
その結果、戦前の日本には市民社会は形成されておらず、そ
れは国家主義的に再編成され温存された古い家長制的な封
建的な共同体社会であり、それを基礎として天皇制ボナパル
ティズム体制が成立したとしているのである。そしてこの
古い共同体を基盤とした社会は戦後もそのまま温存されてい
ると。

寺岡の、西欧のブルジョア革命は政治革命と社会革命が結
合して展開したという認識は、フランス革命の実態にあまり
にも引きずられたものだと思う。先進資本主義国イギリスで
のブルジョア革命は、社会革命が政治革命に先行しているの
であり、この結果、イギリスとフランスの市民社会はその性

格が異なるはずである。寺岡の論は歴史を単純化しすぎており、それは特に「日本の近代」の把握において顕著である。

自由民権運動が「市民革命への萌芽」であったというのであれば、ではその基盤となった都市や農村の共同体は、単に封建的な家父長制的な古い共同体であったのであろうか。市民社会といわれているものも共同体であり、それは封建社会の中で形成された村落・都市共同体の中から生まれたものであり、古い共同体がもっていた封建的・家父長制的性格を多少なりとも引きずったものでしかありえない。寺岡の市民社会の捉え方は、西欧のその理念的理想化像にあまりに依拠しすぎである。

自由民権運動を生み出した村落・都市の共同体は、それ自身が日本的な市民社会といふべきものであり、それを基盤にした市民的な民主主義拡大闘争として自由民権運動の性格があった。それはたしかに弾圧によって抑圧されたが、その運動の成果として立憲君主制という限定的形ではあれ、議会制民主主義の社会が出来上がったのではなかったか。そしてそれは、明治から大正にかけての工業化の進展の中で、特に都市を中心とした中産階級を大量に生み出し、ここに市民社会が形成され、これを基礎として政党内閣が成立し、大正デモクラシーの高揚が出現したのだと思う。

寺岡が言う「天皇制ボナパルティズムの国家構造」とは、このようにしてできた日本的な市民社会を、前期資本主義が帝国主義へと突入し植民地争奪の世界戦争へと入る危機に際

して、日本の前期資本主義の矛盾が爆発しないように、その市民社会を、天皇制の家父長制的構造と軍国主義とによって再組織した結果出来上がったもので、その成立への胎動は1910年の大逆事件をその始原とし、確立したのは1930年代の日中戦争に至る時期とすべきではないのか。

そしてこのような天皇制ボナパルティズムの成立に対して日本左翼がなんら抵抗できなかったのは、その抵抗の基盤となる民主主義的市民社会がなかったからではなく、日本左翼においてはその成立当初からロシア革命史観に基づく暴力革命派が多数であり、資本主義の発展に依拠しながら、市民社会における民主主義の暫時的拡大を通じて資本主義を変えていこうとする、社会民主主義的勢力やその左派としてのサンジカリズムの傾向が脆弱であった結果なのではないのか。

それゆえ天皇制ボナパルティズムに対するレジスタンス闘争は形成されず、戦後民主化がこの闘争の延長上に行われるのではなく、占領軍による上からの改革によって行われ、社会は深く天皇制によって再組織されたままの状態が続いた。故に、日本における戦後左翼は極めて受動的で脆弱であったと考えるべきではないのか。

寺岡の論は、西欧においては、従来の社会主義運動の敗北は、主体の脆弱やスターリニストの裏切りにあるという主体の問題への偏重を排して、革命の客観的基盤がなかったからだと明快に論じており、それは正しい。だが日本におけるその原因を、主体の問題を脇において、民主主義発展の客観的

基盤がなかったという形に歴史を曲解している点は改めるべきであると思う。

この点は、日本における「アナ・ボル論争」や「日本資本主義発達論争」などを総括する過程で、もう一度ブルジョア革命における市民社会と資本主義の関係などを理論的に整理することと、日本の歴史をもっと事実に基づいて検証する作業を行うことによつてより正確に議論できるものと考ええる。

ただしこれらの三つの問題点は、著者寺岡が学者ではなく、第四インターナショナル日本支部の中心的活動家・理論家として、半世紀を越える彼自身の革命家としての運動とその理論とを経験的に総括する中からこの論考が生まれた、という経緯に起因していることを付け加えておきたい。

その上で、以上明らかにした寺岡論考の三点の問題点を明確にすることが、寺岡の20世紀社会主義運動の注目すべき総括を生かし、現状と未来を認識する上で不可欠であると思うのである。

(812 すなが・けんぞう)

しかしこの問題提起は肩透かしをくらい、ほとんど議論できない状態であった。

マルクス主義の基本命題が間違いであり、資本制社会から社会主義的な共同共生社会への移行は暴力革命ではなく、初資本制社会の行き詰まりの中で社会の中から次の新しい社会

組織が作られ、それが資本制社会に取つて代わつて起こるものだと認識は、1999年以来総括作業を担つてきた綱領委員会のメンバーには共有されて来た。そしてその総括に基づいてこれまでも二冊の本を出版し、今回が三冊目であるのだが、グループ全体での討議が組織されて来なかったため、綱領委員会のメンバー以外の者には、驚天動地・青天霹靂の事態と受け止められたようだ。20台からずっと暴力革命で社会を変えろと思つて信じて活動してきたメンバーである。自分の人生そのものが否定されたと受け止めたのであろう。提起に対する質問も討議もなされず、沈黙のまま会議は終了してしまつた。

またこの会議には中国出張中で欠席した、グループの理論的支柱の一人である藤原も亦帰国後、この提起は納得できないとして、事有るごとに綱領委員会のメンバーに討論を吹っ掛けてきたが、残念ながら丁寧な総括論議には至らず、一方的に疑問がつけつけられただけであつた。

その上、この提起をした寺岡自身が、2011年の3月1日の東日本大震災の深刻な被害と、これに伴つて起きた社会的流動を見て、なんと戦略的先祖がえりを起こしてしまい、左翼主体の震災復興を図るフォーラムの実施を提起し、しばらくグループ会議は紛糾した。

寺岡の提起はこうであつた。

① 後期資本主義の成長戦略に基づく成長経済の破綻を全面化させ、世界的にも低成長経済に向けた低成長の時代に

大きく転換せざるを得ない局面に入った。

② 大衆による国際的援助の顕在化。この下からの民衆間の連帯意識は、資本主義的な競争原理の要素を一挙に乗り越えて、資本主義的な利害を超えたところで表現された。人間的な連帯の噴出というインターナショナルな流れの誕生である。

③ 自己中心型の個としての自立から転換した共生や連帯意識の登場。これは新しい共同体に向かう時代の流れ、その運動形成の動きをつかみつつ、それをどのように意識的な流れにしていくのか。あるいは、この流れを運動の主体へと転化できるのが問われている。

という三点の状況認識に基づくものであった。これに対して私は、

① の事態がそのまま社会変革の契機になりうるという認識は、社会変革を外部注的に強行的に行うことが出来るという、マルクスの共産党宣言に始まる誤った認識の尻尾が仄見えている。

② の認識は、福島第一原発事故の深刻さを過小評価するとともに、内外の震災復興支援の動きは「非日常」の動きであるにも関わらずそれが「日常」の意識の変化を示すものだと過大に評価したものである。

③ の認識は、この考え方には、社会変革の指導部が左翼であるとする前提と指導部は意識的に作られるというレー

ニンの前衛党論が仄見え、この考え方に立って見ると指導潮流が不在であり危機が増幅されるという寺岡の危機感が生まれるに過ぎない。

との三点にわたる批判を提示し、実際の政府や地域での復興の動きの外側に対置して、左翼主導の復興フォーラムを適することは何の意味もない行動であると提起した。

これに対して寺岡は再提案を行ったが、その中身は最初のものと同じで、フォーラムの名称が「市民フォーラム」と変わっただけのものであった。

残念ながら二つの提起を受けての会議は焦点が定まらない散漫なものになり、認識を深めることもなく、何を成すかを決めないまま解散となってしまった。

その後のグループの動きは、「アメリカ型資本主義の歴史的展開と総括」をした上で、「共同体」と「市民社会」の研究、そして戦前戦後を貫く「日本の雇用システム」の解明・総括と、新たな検証テーマを設けて討論を進めたが、多くの会議で綱領委員会メンバー以外のグループメンバーの参加はほとんど見られず、しかも寺岡は指定されたテキストを読むこともせず、自身のマルクス主義的に偏った認識をただぶつけるだけで、根源的な再検討が進むことを阻害するだけであった。

こうしてグループの活動は次第に停滞し、運動の支柱である元労働情報編集長の江藤正修さんが2017年5月24日に亡くなり、このことを報じた2017年8月31日刊行の「インターナショナル第228号」公開と、10月8日の偲ぶ会開催とここに向けての遺稿集発行を持って、事実上活動を停止。そして18年5月の一周忌の集まりを経て、解散宣言をせずに自然消滅させ、メーリングリストだけを残して、今後も緩いつながりで討論は継続するとし、今に繋がっていません。

マルクス主義の誤りについての総括は、一定の結論はでましたが、グループ全体での共通認識には至らず、さらにグループの周辺に広げることならず、中途半端に終わりました。

(2026年2月4日 記)